

## ジャワ社会における人間関係分析のための 言語社会学的方法について

染 谷 臣 道

(帯広畜産大学社会学研究室)

1980年8月31日受理

### On the Socio-linguistic Method for the Analysis of Interpersonal Relationships in the Javanese Society

Yoshimichi SOMEYA

本稿は、ジャワ語の言語的階層（敬語の諸段階）を通してジャワ社会における人間関係（二者関係）を分析するための方法を確立することを目的とする。

第1章では一般に行なわれているジャワ語の階層分類と使用状況を概括的に説明する。第2章では筆者が得たジャワの一農村での会話例を提示し、さらに第3章において従来分類法では実際の資料を適切に分析できないことから新たな方法を提案する。

#### 第1章 言語階層の分類

ジャワ語の語彙は、敬意を含まない中立的な常形 *ngoko*<sup>1)</sup>を基本とし、順次より高い敬意を内包する準敬形 *madya*, 敬形 *krama*, 最敬形 *krama inggil*, 最敬形と相補的關係にある謙讓形 *krama andhap* 及びそれら言語的階層から自由な共通語から成る<sup>2)</sup>。

語彙数では、共通語を別にすれば、常形が最も多く、ついで敬形、最敬形、60語から70語ほどしかない準敬形、そして謙讓形が最も少ない。極く基本的には、Koentjaraningratの指摘通り、常形語彙は話者が（自分より）地位が低いとみなした対者、（自分より）年少とみなした対者、また社会的には同じような地位にあるが、親しい関係にある対者に用いられ、他方、敬形語彙は、それとは反対に、話者が（自分より）地位が高いとみなした対者、（自分より）年長であるとみなした対者、また親しくない者あるいはヨソ者に対して用いられるとよい (Koentjaraningrat, 1957, p. 14)。準敬形語彙は、文字通り常形語彙と敬形語彙の中間的機能を果す。(対者及び他者については) 最敬形語彙が、(自己については) 謙讓形語彙が敬形を超越する高さ(あるいは低さ)を表現する機能をもつ。

日常会話はこれら四つの階層の語と共通語が適宜組合わされて構成されるが、それらは大まかにみればいくつかの型式にまとめられるもの、後にみるように、しばしば「破格、的文

第1表 文の型式とその内容

文の型式	一人称代名詞	二人称代名詞	接辞	語	形	備考
1. 純粹常体	<i>aku</i>	<i>kowé</i>	ng	(ng)		
2. 最低語一類	<i>aku</i>	<i>penjenengan</i>	ng	(ng)		1. 接辞と語形の記号 (ng, kr など) については第2章参照 (15頁) のこと。
3. 最低語二類	<i>aku</i>	<i>penjenengan</i>	ng	(ng)	kr	ki
4. 常準敬体	<i>kula</i>	<i>ndika</i>	ng	ng	(md)	
5. 敬準敬体	<i>kula</i>	<i>sampéyan, samang</i>	ng		(md)	kr
6. 中間準敬体	<i>kula</i>	<i>sampéyan, samang</i>	ng		(md)	kr ki[ka]
7. 老敬体	<i>kula</i>	<i>sampéyan</i>	ng		(kr)	
8. 純粹敬体	<i>kula</i>	<i>sampéyan, penjenengan</i>	kr		(kr)	
9. 若敬体	<i>kula</i>	<i>penjenengan</i>	kr		(kr)	ki[ka]
10. 最敬体	<i>kawula</i> など	<i>penjenengandalem</i> など	kr		(kr)	ki[ka]

体も現れ、ジャワ語使用者の複雑な心境を垣間みるかのごとくである。

従来よりジャワ語の諸文型は、それら諸語彙の組合せ方に従っていくつかの階層 (*ung-gah-ungguhing basa*) に分類されてきた。分類の仕方や用語に論者によって若干の相違がみられるものの、最も一般的に行なわれてきたものは十分類法である。以下その概略を紹介しよう。ただし、階層の順序については、本稿の目的に合わせて最も敬度 (敬意の度合) の低いものから順次高いものへと配列を変更した (第1表参照)。

### 1. 純粹常体<sup>3)</sup> *ngoko lugu*

常形語彙及び共通語のみから成る文の型式である。一人称代名詞及び二人称代名詞は常形の *aku* と *kowé* (いずれも男女共通) を用いる。

この型式は、同じような社会的地位にあって親密で遠慮を必要としない一般人の間で用いられる (崎山, 1974, 107 頁。Bakker, J. W. M., 1964, p. 9, Geertz, C., 1960, pp. 255-256, Koentjaraningrat, 1957, p. 15)。また、「内省的言語 (独り言) として」 (崎山, 1974, 107 頁) 用いられる他に、「(話者より) 若くて地位も低い人に対して」 (Koentjaraningrat, 1957, p. 15) や「高い地位にある人が農民に対して」 (Geertz, C., 1960, p. 256), また「例えば町の裕福な商人が大工に対して」のように町の中流階層の者が下層の者に対して用いる (Geertz, C., 1960, p. 257)。つまり、一般に、年齢や地位などで優越する者が劣位の者に対して用いる型式である。

### 2. 最低語一類 *antya basa*

純粹常体を基調とするが、対者の身体部分、所有物 (肉親などをも含む) 並びに行為などについて最敬形語彙を用いる文の型式である。従って、一人称代名詞は常形の *aku* をそのまま使うが、二人称代名詞は最敬形の *penjenengan* (*panjenengan* とも綴る) を使う。*penjenengan* に代わって *sliramu* を使うこともある。*slira* は *awak* (身体) の最敬形で、*mu* (お前の) は常形接辞である。

Geertz の言う雅常体 *ngoko sae* (ないし *ngoko alus*) は、彼が引き合いに出している例文をみる限り、この部類に入る<sup>4)</sup>。雅常体について彼は、「プリアイ<sup>5)</sup>独特のものであって……親しい言葉を使えるほどに十分知り合っているが、それにもかかわらず敬意を表わしたいような友人や親族に対して用いられる」(Geertz, C., 1960, p. 257) とし、崎山にも同じような説明がみえる(崎山, 1974, 108 頁)。この他に「年長者が地位のより高い年少者に」(崎山, 1974, 108 頁, Bakker, J. W. M., 1964, p. 9) 対して用いたり、「役人の妻が夫に用いる」(崎山, 1974, 108 頁)。

### 3. 最低語二類 *basa antya*

最低語一類を基調とするが、話者が必要と思う限りで常形語彙を敬形語彙に代えることができる型式である。人称代名詞は最低語一類と同じである。

最低語一類に一層の丁寧さないし敬意を加えたものであるから最低語一類が使われるのと同じような状況で使われるだろう。Bakker は「地位が(自分より)低い年長の親族に」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 9) 用いられるとして最低語一類との対比性を示したが、それだけの用法に限られるとは思えない。

### 4. 常・準敬体 *madya ngoko*

準敬形語彙がある限りそれを使用するが、ない場合には常形語彙を用いる文の型式である。一人称代名詞は敬形の *kula*, 二人称代名詞は準敬形の *ndika* を使用する。接辞は常体はもちろん全ての準敬体(常・準敬体, 敬・準敬体, 中間準敬体)と老敬体で常形が用いられる。

「主に、地方人同士, 女性の行商人同士で」使用したり、「時に役人が目下に向かって用いる。」(崎山, 1974, 109 頁)。準敬体全般の用法について(従って常・準敬体, 敬準敬体, 中間準敬体が一括される) Bakker は「下層プリアイ同士や幾分か敬意を必要とする友人に対して用いる」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 18) とし、Koentjaraningrat は「(自分より)地位が低い者や若い者で丁寧に應對したいが敬体で話すほど(地位などが)高くはない人に」(Koentjaraningrat, 1957, p. 16) と説明している。

### 5. 敬・準敬体 *madya krama*

準敬形の語彙がある限りそれを使用するが、なければ敬形語彙を用いる型式である。一人称代名詞は常・準敬体の場合と同じく *kula* を用いるが、二人称代名詞は敬形の *sampéyan* (時に準敬形の (sa)mang) を用いる。

親しい役人同士(崎山, 1974, 109 頁)やなじみではない普通の町人同士や農民同士(Geertz, C., 1960, pp. 256-257) の日常語である他に、地方人の間で年長者や敬うべき人に対して用いられたり、役人の妻が夫に対して用いたり(崎山, 1974, 109 頁)、また農民が高い地位の人に向って使ったり、「例えば大工が町の裕福な商人に対して、というような町の「下層、の者が「中層、の者に対して」(Geertz, C., 1960, pp. 256-257) 用いる。

6. 中間準敬体 *madyantara*

敬・準敬体を基調とするが、対者の身体部分、所有物、行為などについて最敬形語彙を採用する文の型式である。人称代名詞は敬・準敬体と同じである。Geertzはこの型式はないとしているが (Geertz, C., 1960, p. 253), 彼の調査地では存在しなかったのかもしれない。しかし、例えばマルタニ村では重要な型式の一つである。

「役人の妻が夫に使う形式とされるが、絶対にそうであるというわけではない」(崎山, 1974, 109-110 頁) という説明以外には見当たらない。崎山の説明にしても必ずしも明瞭ではない。最低語一類と最低語二類の関係に似て、中間準敬体は敬・準敬体を一層丁寧あるいは敬度を強めたものと考えられるから、敬・準敬体が使用されるような状況で用いられよう。

7. 老敬体 *wredha (werdha) krama*

敬形語彙を基調として用いる文の型式であるが、常形の接辞を使うために完全な敬体になり切っていない。一人称並びに二人称代名詞は *kula* と *sampéyan* である。

「年長者が年少者に常体のみで話すにはまだ遠慮がある場合に用いる」(崎山, 1974, 111 頁) とか、「同じ社会的地位にある年長者から年少者へ」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 9), あるいは「年長者が(彼より)地位が高い年少者に対して用いる」<sup>9)</sup>(Dirdjosiswojo, 1957, p. 7) というように、地位については各論者の意見は一致しないが、年長者から年少者への文の型式であるという点では一致している。この他、Koentjaraningrat は「同年齢だが、地位は(自分より)低く、なじみとなっていない仲間に対して」(Koentjaraningrat, 1957, p. 16) 用いると指摘している。

8. 純粹敬体 *krama lugu*<sup>10)</sup>

敬形語彙と共通語から成る文の型式で、接辞も敬形になる。人称代名詞は *kula* と *sampéyan* だが、最敬形 *penjenengan* も使用される。

「まだねんごろでない同地位の人同士」(崎山, 1974, 110 頁) や「明らかに同じ地位で同じ年齢であるが、よくなじんでいない人に対して」(Koentjaraningrat, 1957, p. 16) 用いる。また、「同じ地位と年齢のプリアイ同士」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 9) とか「親友ではないプリアイ同士」(Geertz, C., 1960, p. 256) というようにプリアイ社会に使用を限定する論者もいる。接辞が完全に敬形化されるので老敬体より敬度は高くなる。従って老敬体以上に対者に敬意を表わしたければ「年長者が年少者に用い」(崎山, 1974, 110 頁) ても不合理ではない。

9. 若敬体 *mudha krama*

純粹敬体を基調とするが、対者の身体部分、所有物、行為等について最敬形語彙を用いる文の型式である。

「同じ社会的地位にある年少者が年長者に」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 9), あるいは単に「年少者が年長者に」(崎山, 1974, 111 頁) というように、この型式は基本的には年少者の年

長者への文型である。しかし年齢の高低から離れ、社会的地位の上下や関係の親疎を基軸として用いられることは当然考えられ、「普通の教育ある都市人が高級役人に対して用い」<sup>9)</sup>たり (Geertz, C., 1960, p. 256), 「十分に気の置けない友人同士で」(崎山, 1974, 111 頁) 用いられる。

#### 10. 最敬体 *krama inggil*<sup>10)</sup>

若敬体を基調とするが、自称詞(一人称代名詞)に一層の謙譲が込められた *kawula*, *abdidaem* などが用いられ、対称詞(二人称代名詞)に敬意が込められた *penjenengan dalem* などが用いられる型式である。

「王族、貴族、家柄や社会的地位の特に高い人に対して」(崎山, 1974, 111 頁) 用いられ、更に「被造物が神に」(Bakker, J. W. M., 1964, p. 9) 対して用いる。完全な形での使用は著しく限定される。

以上が十分類法の内容である<sup>10)</sup>。

## 第2章 資 料

検討の対象となる例文は、マルタニ村<sup>11)</sup>の男女10人が村内の様々な人を念頭に置き、日頃使っているような会話例を作文したその一部である。筆者はこれとは別に村人の自然な会話をテープに収録したが、それらと比較しても作られた例文に不自然さが認められなかった。従って本例文はほぼ実態に即したものと考えてよい。

各単語の下に語形を記号で示したが、それぞれの記号の意味は次の通りである。

*ng=ngoko* (常形), *md=madya* (準敬形), *kr=krama* (敬形), *ki=krama inggil* (最敬形), *ka=krama andhap* (謙譲形), *inf. var.=informal variant* (非形式的異形で、うちとけた状況において用いられる), *sbst=substandard* (非標準形, 地方的異形), 共=共通語(常形・敬形共通語), イ語=インドネシア語。

接辞には( )をつけた。*sing*, *nek*, *si* など常形と準敬形が同一の単語については文の脈絡を考慮していずれかに適宜分類した。また、呼称としての親族用語、固有名詞(人名, 地名, 機関名等)は分類の対象から除外した。

第2表は、各例文の話者名と対者名それに両者の年齢(( )内)を示したものである。性別及び人名は全て記号化してあるが、最初の m, f はそれぞれ男子(=m←male)及び女子(=f←female)を意味する。結婚し世帯を形成した者の名前は大文字二字で、また未婚者の名前は小文字二字で示した。なお、備考欄に話者からみた対者との親族関係などを記入した。本稿の目的から外れるので、話者及び対者の特性(財産所有状況, 職業, 農作業における雇用・被雇用状況, 社会階層, 村役職の就任状況, 学歴, 出身地, 親族関係など)については示唆程度にとどめた。別の機会に体系的に紹介し論じたいと思う。

第2表 話者名・対者名

例文番号	話者	対者	備考	
A	1	mSR (55)	fst (17)	FaYoBrSoDa
	2	mSA (51)	mam (17)	
	3	mMR (57)	mDP (37)	
	4	mKR (47)*	fra (17)	YoSiDa
	5	fTW (46)	fDP (32)	
B	1	fst (17)	mMA (50)	FaFaElSiSo
	2	fDP (32)	fDR (33)	
	3	mMR (57)	fHI (47)	WiFaYoBrSoWi
C	1	fst (17)	mMM (42)	FaFaElBrDaSo
	2	fDP (32)	mAM (26)	
	3	fTW (46)	fNS (45)	
D	1	fst (17)	fAO (58)	
	2	fDP (32)	mSR (55)	HuFaElBrSo
	3	fTW (46)	mWD (60)	
E	1	mSA (51)	mTB (60)	
	2	mSR (55)	mHP (41)	
	3	mMR (57)	mWR (63)	
	4	fst (17)	fHS (21)	FaFaElSiSoSoWi
	5	mSA (51)	mDP (37)	
F	1	fst (17)	fSR (55)	FaFaElBrSoWi
	2	fTW (46)	fRR (46)	HuMoFaScWiSoWi
	3	mSR (55)	mAD (73)	FaYoBr
	4	msn (18)	mDP (37)	
G	1	fst (17)	fJS (57)	<i>dukuh</i> 夫人(対者)
	2	mSA (51)	mJS (65)	<i>dukuh</i> (対者)
	3	msn (18)	mSW (60)	<i>radèn</i> (対者)
	4	mMR (57)	mST (68)	<i>radèn</i> (対者)
	5	mSR (55)	mSD (40)	<i>radèn</i> (対者)
	6	fTW (46)	fPW (64)	<i>radèn ngantèn</i> (対者)
	7	fDP (32)	fMR (50)	
	8	mJS (65)	mAD (73)	

注 Fa: father  
 Mo: mother  
 ElBr: elder brother  
 ElSi: elder sister  
 YoBr: younger brother  
 YoSi: younger sister  
 Hu: husband  
 ScWi: second wife (後妻)  
 Wi: wife  
 So: son  
 Da: daughter  
*dukuh*: 村長(部落長)

*radèn*: 貴族の称号の一種

*radèn ngantèn*: 女子につける貴族の称号の一種

\* mKR は、自身45歳と述べたが、後の調査で47歳であることが判明した。ここに訂正する。(染谷, 1980, 157頁参照)

最後に「近似的、な日本語訳をつけた。

A. *aku-kowé*

1. Rat, mbokmu mau arep nyang endi, aku weruh soré-soré mau karo bapakmu. Kowé  
共 (ng) ng ng ng ng ng ng ng ng ng ng 共 (ng) ng  
kok ora mèlu?  
共 ng ng
2. Jo, wingi soré tak golèki kok ora ana, jaré ngaji. Ngaji nèng endi?  
共 ng ng ng 共 ng ng ng (ng) 共 共 ng ng
3. Lé D, aku ki ngélingké karo kowé, bab lemu ki ya kena kena waé. Ning aja  
ng ng ng (ng) ng ng 共 ng ng ng ng ng ng 共 (inf.var.) ng  
ngliwati bates.  
ng 共
4. Rat, aku njaluk kongkon kowé nang Prambanan jalukna dhuwit nang dalemé pak D.  
ng ng ng ng ng 地名 ng ng ng ki (ng) 共
5. Dhik D, kowé rak durung ngerti ta, kidul kana ki sésuk arep ana kethoprak jé. Aku  
ng 共 ng ng 共 共 ng ng ng ng ng ng 共 ng ng  
ya arep ndelok ki.  
ng ng ng ng

B. *aku-sampéyan*

1. Pakdhé, aku diwelingi mbokdhé M sampéyan kon ngidul.  
ng (ng) 共 共 kr ng 共
2. Aku ijol gabah winih nem likur, sampéyan tesih kagungan ora?  
ng ng 共 共 共 共 kr md ki ng
3. Lik A, aku njaluk tulung sampéyan, gandhèng ana tamu mang godokna wédang.  
ng ng 共 kr 共 ng 共 md 共 ng

C. *aku-njenengan*

1. Lik, aku mau kon nggolèki njenengan, sing ngutus mbah M.  
ng ng ng ng ki (inf. var.) ng ki 共
2. Aku tuku boboné mas, njenengan pilihké sing jeruk.  
ng ng (ng) ki (inf. var.) 共 (ng) ng ng
3. Dik N, njenengan rak ora ana pegawéyan liya ta? Nèk ora, aya mèlu aku tandur  
ki (inf. var.). 共 ng ng ng ng 共 ng ng ng ng ng ng  
nyang nggoné pak M sésuk. Gelem ora?  
ng ng (ng) 共 ng ng ng

D. *aku-penjenengan*

1. Aku mengko arep nang nggonamu jé mbah, penjenengan mengko nèng dalem ora?  
ng ng ng ng ng (ng) ng ki ng ng ki ng

2. Aku arep kumpulan pakdhé, penjenengan ki arep tindak sabin?  
*ng ng ng ki ng ng ki kr*
3. Pak W, penjenengan dodol lawuh ora, nèk ana aku arep tuku.  
*ki ng 共 ng ng ng ng ng ng*

E. *kula-sampéyan*

1. Pak T, sampéyan sampun didhawuhi pak S menapa dèrèng, menawi sampéyan  
*kr kr (ng) ki 共 kr kr kr kr*  
 kapurih nyapu mergi kilèn sampéyan?  
*共 共 kr kr kr*
2. Kula nyuwun tulung dhik H, mengké samang dandoské èmbèr.  
*kr ka 共 kr (sbst) md kr (ng) 共*
3. Pak W, kok klèntu ta sampéyan niku, sampéyan rak sampun kula aturi.  
*共 kr 共 kr md kr 共 kr kr ka*
4. Yu, kula wau ditakèni adhiné sampéyan, turené madosi sampéyan. Jaréné penting  
*kr kr (ng) kr 共 (ng) kr md (ng) kr kr ng (ng) 一語*  
 ngaten kok wau.  
*md 共 kr*
5. Uleman ingkang dhateng kalurahan menapa sampéyan teraken piyambak, menapa  
*共 kr kr 共 kr kr 共 (kr) kr kr*  
 sampéyan titipaken?  
*kr 共 (kr)*

F. *kula-njenengan*

1. Mbokdhé S, kula dikèngkèn simbok, njenengan kèn ngréncangi tanem ten  
*kr (ng) kr 共 ki (inf. var.) kr kr kr kr (inf. var.)*  
 étan dhusun.  
*共 kr*
2. Mbok R, kula titip si Hermin. Mengké nèk mantuk king sekolah njenengan criyoské  
*kr 共 md 人名 kr (sbst) md kr md 共 ki (inf. var.) kr (ng)*  
 nèk kula teng Prambanan nggih. Mengké ajeng diolèh-olèhi ngaten.  
*md kr md 地名 md kr (sbst) md (ng) ng md*
3. Paklik, mbenjang nèk kula ajeng ngomah-omahké si Jumikem, njenengan kula  
*kr (sbst) md kr md ng (ng) md 人名 ki (inf. var.) kr*  
 suwuni berkah pangèstu nggih lik.  
*ka 共 共 md*
4. Lik, kula wau dolan ten nggèn njenengan jé, ning griyané  
*kr kr 共 kr (inf. var.) kr ki (inf. var.) ng 共 (inf. var.) kr (ng)*  
 njenengan suwung.  
*ki (inf. var.) ng*

G. *kula (dalem)-penjenengan*

1. Mbah, dalem badhé nyuwun ngampil lancar, kalih mangké penjenengan kèn  
           *ka kr ka ki kr md kr ki kr*  
     ngrawuhi dhateng panggènanipun simbah.  
           *ki kr kr (kr) 共*
2. Nyuwun pangapuntèn Pak, mbok bilih panjenenganipun mboten dhumpyuk acara,  
           *ka kr kr kr (kr) kr 共 共*  
     mbenjeng-enjing siang kula aturi tindak panggènan kula saperlu manggihi tamu kula  
           *kr kr kr ka ki kr kr 共 kr 共 kr*  
     ingkang saking KODIM.  
           *kr kr 機関名*
3. Injih kepareng matur dumateng bapak, kula mriki pun utus kaliyan mbah R kapurih  
           *kr kr ka kr 共 kr kr kr ki ka 共 共*  
     nyuwunaken ngampil kagunganipun lampu.  
           *ka (kr) kr ki (kr) 共*
4. Mas, penjenengan sak-bakdanipun undangan menika teras kondur menapa boten?  
           *ki 共 (kr) 共 kr kr (sbst) ki kr kr*
5. Kala wingi kula sampun pinanggih Pak Dukuh, terosipun penjenengan supados énggal  
           *kr 共 kr kr 共 kr 共 共 kr (sbst) ki kr kr*  
     rawuh.  
           *ki*
6. Bu, nalika dinten Senèn wingi kula sowan penjenengan, ning penjenengan boten  
           *共 kr 共 共 kr ka ki 共 (inf. var.) ki kr*  
     wonten turéné teng sabin.  
           *kr md (ng) md kr*
7. Kula nyuwun ngampil gunting, penjenengan mangké ngagem boten?  
           *kr ka kr 共 ki kr (sbst) ki kr*
8. Matur bapak, mangké sonten kula aturi mendhetaken ngantènan pak.  
           *ka 共 kr kr kr ka kr (kr) 共*

## A. 俺 (わし, わたし) — お前, 君

1. 「ラット, お前の母さん, どこへ行こうとしていたんだね。俺, この夕方, お前の父さんと一緒に出掛けるところを見たぞ。お前も一緒に行かなかったのかい?」
2. 「ジョ, きのうの夕方, わし, お前を探したんだが居らなかった。何でもコーランの勉強に行ったんだとか。どこで勉強してるんだね?」
3. 「D よ。お前が忘れないように言っとくけどな。肥ってるってことはだな, 病気にかかりやすいってこっちゃ。限度を越えんことだな。」
4. 「ラット, お前な, プランパーナン<sup>12)</sup> (の町) まで行ってだな, D さんのお宅に行って集

金してきてくれ。」

5. 「D さん、あんた、まだ知らないだろう。あっちの南の方であしたケトブラック<sup>18)</sup>があるんだとさ。わたしは見に行くわ。」

B. 俺(わし、わたし) — あんた

1. 「おじさん、わたし、M おばさんに頼まれたの。あんたが南の方に<sup>19)</sup>来るようにだつて。」

2. 「わたし、26 番<sup>19)</sup>の種籾を交換したいんだけど。あんたまだ持ってらっしゃる？」

3. 「A さん、わし頼みがあるんだ。お客が来たんでのう、あんた湯をわかしてくれんか。」

C. 俺(わし、わたし) — あなた

1. 「おじさん、わたし、あなたを探してくるように言われたの。M 爺さんのお言いつけなの。」

2. 「ポポ<sup>16)</sup>を買うね。あなた、オレンジのを選んでよ。」

3. 「N さん、あなた、他に仕事ないんでしょ？ ないんなら、わたしと一緒にあした M さんの所で田植えしようよ。いい？」

D. 俺(わし、わたし) — あなた様

1. 「わたし、あとで、ばあちゃんのところへ行きたいんだけど、あなた様お宅にいる？」

2. 「わたし、会合があるんだけど、あなた様は田圃にいらっしゃるのですか？」

3. 「W さん、あなた様おかず売ってる？ あつたら、買いたいんだけど。」

E. わたくし — あんた

1. 「T さんよ。あんたに S さんのお言いつけがありましたか。まだですか？ あんたの場合、あんたの所の西側の道を掃除するようにでしたね？」

2. 「H 君、お願いします。あとであんたバケツを直しておいてくれ。」

3. 「W さん、あんた間違ってるぜ。あんたにはもうわたくしが申し上げておいたのに。」

4. 「ねえさん、わたくし、あんたの弟にきかれたの。あんたを探しているんですって。何でも重要な事だそうよ。」

5. 「村役場あての招待状、あんた自分で持参しますか、それとも預けますか？」

F. わたくし — あなた

1. 「S 伯母さん、わたくし、お婆さんに頼まれまして、あなた、村の東(の田圃)を(皆と)一緒に田植して下さいですって。」

2. 「R 母さん、わたし、ヘルミン<sup>17)</sup>を預けてゆきます。あとで学校から帰りましたら、わたしはプランバーナンに行ったと、あなた、言って下さい。あとでみやげを買ってきますよ。」

3. 「叔父貴、いつかジュミクム<sup>18)</sup>を嫁がせる時にゃ、叔父貴あなたの祝福を賜りたい。」

4. 「おじさん、あなたの所へ遊びに行きましたけど、お宅は留守だったよ。」

G. わたくし — あなた様

1. 「お婆さん、わたくし、お皿を拝借致します。で、あとであなた様が祖父の所にいらっしゃいますようにとのことでございます。」
2. 「失礼致します。もしあなた様の御予定と一緒にということでありませぬならば、明日午後、陸軍地方司令部<sup>19)</sup>からの私のお客にお会いしていただきたく私の所にいらっしゃるようお願い致します。」
3. 「申し上げます。私、R 爺さんの御言いつけであなた様のランプを拝借して来るようにとのことで来ました。」
4. 「この招待のあとあなた様はそのまま御帰館されますか。」
5. 「きのう、村長（部落長）に会いましたが、何でもあなた様がすぐにいらっしゃるようにとのことでございます。」
6. 「きのうの月曜日、わたくしこちらに伺いましたが、あなた様は御在宅ではありませんでした。聞いたところでは、田圃に、とのことでした。」
7. 「ハサミを拝借したいんですが、あなた様はあとで御使いなさいますか。」
8. 「申し上げます。後程夕刻、結婚式をとり行なっていたいただきたくお願い申し上げます。」

### 第3章 討 論

第1章で紹介したジャワ語の使用状況に関する諸論者の説明をまとめてみると、農村住民に縁のある言語の階層は、純粋常体、最低語一類、常・準敬体そして最も高く敬・準敬体だということになる<sup>20)</sup>。つまり、最低語二類や中間準敬体以上の優雅 *alus* な言語階層は農村住民の使用するところではないというわけだ。

第2章の資料はこうした従来の「常識」を真向から打破するものである。実に中間準敬体はもちろん擬似最敬体といえるような文型さえも含まれているからであり、そのために純粋常体から敬・準敬体に至る農村の言語使用に関する説明もまたほとんどマルタニ村の実態と一致しないからである<sup>21)</sup>。また、基調としては常体にとどまりながら対者への代名詞に準敬形 (*samang* が使われている。*ndika* は聞かれなかった)、敬形、最敬形の非形式的異形 (*njenengan*) を適用する型式は十分類法などに見出されない。辛うじて Geertz の分類の中に (人称代名詞の対応が *aku-sampéyan* と考えられる) 「準常体」*ngoko madya* を認めるのみである。

マルタニ村の資料はどのように分析されるべきか。従来の分類法が不適切であることが明らかになったからには、新しい分類法が構築されねばならない。筆者はそのために一人称代名詞と二人称代名詞に着目した分類方法を提案する。もしその方法が適切であるならば、使われている人称代名詞を調べるだけで二者関係の性格を知ることができるはずである。多数の二者関係の有様を調査する上できわめて有効かつ能率的である。

いうまでもなく、十分類法などは可能な限り分析の手助けとされねばならない。また注意

すべきことは、例文の階層を分析する際には当面文体そのもののレベルでなされるべきであって話者と対者の特性を考慮に入れてはならない。

使用されている語の語形からみて A 型 (*aku-kowé*) の例文はいずれも純粋常体そのものであり、また G 型 (*kula-penjenengan*) は、(G-1, G-6 において準敬形がわずかに使用されているものの最敬形や謙讓形の使用状況から判断して) 若敬体 (ないし一部は擬似最敬体) に属するとして問題はない。両者は最低と最高の二つの階層であり、あたかも両極端を明確に限界づけているかのようである。

問題は (その中間の) B 型, C 型, D 型の間の相違と E 型, F 型の間のそれがどのようなものかということである。便宜上, E 型と F 型の比較から行なおう。

まず村人の意識によれば、最敬形の非形式的異形 *njenengan* が敬形の *sampéyan* より敬度は高いということを述べておく。これが文体そのものから証明されれば問題は解決する。E 型と F 型の例文を十分類法に従って考察してみる。

E-1 老敬体。敬形が基調になっているが、接辞は常形である。( *dhawuh* <お命じになる> (最敬形) はその行為主体である *pak S* に対する敬意から使われたものであって、対者への敬意からではない。第三者に最敬形を用いたことは、少くとも対者は第三者より高くはないと話者がみなしていることを示しているが<sup>22)</sup>、それは話者と対者の間の関係には直接的な影響を与えない。)

E-2 敬・準敬体ないし中間準敬体。 *samang* と *nyuwun* (お願いする, 謙讓形) が使われている。

E-3 中間準敬体。準敬形の *empun* ではなく敬形の *sampun* と謙讓形 *aturi* (申し上げる) が用いられている。

E-4 敬・準敬体。ただし、常形の *jaréné* (「～とか言うことだよ」の意味) が使われているので常体の方向に幾分か引張られている。

E-5 純粹敬体。

F-1 老敬体。敬形が基調をなしているが、接辞が常形であることと非形式的異形の *ten* が使われていることなどから純粹敬体に入れがたい。

F-2 敬・準敬体。

F-3 中間準敬体。謙讓形の *suwun* が用いられている。

F-4 老敬体。敬形が基調となっているが、常形の接辞と語が用いられてもいる。常体方向に引張られた変則的文体である。

E 型, F 型いずれの例文も、四つの階層にはほぼ無差別的に分布している。これは、以上の例文の作者の中には *njenengan* を用いない者 (E-1, E-3, E-5 の作者。ただし、E-1 と E-5 は同一作者による。彼らにとって *sampéyan* と *njenengan* の区別は問題にならない) がいる

からである。そこでこの二つの代名詞を共に用いる者について調べれば、自ら両者の間の差違がはっきりするだろう。E-2 と F-3 は共に mSR が話者であり、E-4 と F-1 も共に fst によるものである。E-2, E-4 とともに敬・準敬体であり、F-3 は中間準敬体、F-1 は老敬体である<sup>23)</sup>。F 型が E 型より高い階層にあることが示唆されている。

他の例文をも引用してこの点をもっと明かにしよう。

fDP は mNS に向って次のような言い方をするという。

Lik kula ajeng teng Tegal, sampéyan mlampah boten? (おじさん、私トウガルに行くところ  
kr md md 地名 kr kr kr

ですが、あんたは出掛けないんですか?)

他方 mHJ に対しては次のように言う。

Kula ajeng ten Prambetan pakde, njenengan tindak boten? (私、プランバーナ  
kr md kr (inf. var.) 地名 ki (inf. var.) ki kr

ン(の町)に行くところです、おじさん。あなたはいらっしゃらないんですか?)

前者は準敬形を基調とし、敬形を用いた敬・準敬体、後者は同じく準敬形を基調としているが、敬形の他に最敬形も採用されているところが注目される。後者は中間準敬体とすべきだろう。なお、普通にはしないことだが、Prambanan という地名が敬形化され Prambetan となっていることも後者の文の高さを表すといつてよい。

fTW は fSK に対し、

Dik P, sampéyan empun jagong sing teng Tegal dèrèng? Nèk kula mengké sonten  
kr md 共 md md 地名 kr md kr krc(sbst) kr

mawon. (P さん、あんた、トウガルの結婚式にもう行った、まだ?、私はあとで夕方に行き  
md

ますよ。)

と言うが、fST に対しては、

Bu S, kala wingi njenengan rak saestu tindak boten, kok kula entosi boten  
kr 共 ki (inf. var.) 共 kr ki kr 共 kr kr kr

ketingal-ketingal. (S さん、昨日本当にいらっしゃったのですか。私、探しましたが見当  
kr

りませんでしたよ。)

と言う。前者が敬・準敬体であるのに対して後者は明かに若敬体の型式である。

以上いずれの場合も *sampéyan* を用いた文よりも *njenengan* を用いたものの方が高い階層にあることが明かになった。このことから B 型と C 型の差違も決定できる。B 型の文体と C 型のその間には顕著な差はない。しかし、二人称代名詞の間の差が明かになった今、C 型が B 型より高い階層にあるとして差支えない。

D 型は二人称代名詞が何ら省略されることなく用いられていることで既に C 型より高い

階層と判断してよいが、なおその他に対者の所有物 (*dalem* 〈お宅〉) や行為 (*tindak* 〈いらっしやる〉) に最敬形を用いていることが文の高さを示している<sup>24)</sup>。

A 型を最低とし順次敬度を高め G 型において最高の敬度を内包することが明かにされた。これによって使われる人称代名詞を手がかりとして二者関係の有様を知ることができるわけである。

本論では特にとりあげなかったが、人称代名詞とは別に (しかし同じように二者関係の有様をよく示す) 呼称の機能にも注意すべきである。本論で引用された例文でもしばしば現れたように、呼称は実に頻繁に用いられ、人称代名詞を補完するかのようである<sup>25)</sup>。従って二者関係の性格の解明にあたっては、人称代名詞と呼称の両方が考慮に入れられなければならない。

## 注

- 1) 本稿では語については常形、準敬形というように「……形」と表現し、文体については常体、準敬体のように「……体」と表現する。
- 2) 数の上では少ないが、これらの他に宮廷語 *basa kedhaton* または *basa bagongan* 及び貶称語 *basa kasar* などがある。
- 3) 文の型式についての訳語は多くの場合、崎山に従った。崎山, 1974, 94 頁—120 頁参照。
- 4) Geertz のあげる例文は次の通りである。なお、各単語の下の記号については第 2 章を参照のこと。  
*apa panjenengan arep dhahar sega lan kaspé saiki?*  
*ng ki ng ki ng ng 共 ng*  
 ただし、一部現在一般に行なわれている綴字法に改めた。Geertz, C. 1960, p. 252.
- 5) プリヤイ *priyayi* とは、Geertz がジャワ文化の「下位伝統」(subtradition)の一つとしたものであるが、その伝統を保持発展させてきた人々(貴族)の意味もある。「プリヤイとは元来専ら、世襲貴族を指していた。オランダ人はこの世襲貴族を、征服された土侯国の王から引き離し、任命による給料取り公務員へと変えていった。植民地以前のヒンドウ的ジャワ宮廷に究極の起源をもつこのホワイトカラー・エリートは、非常に洗練された宮廷の礼儀や舞踊、演劇、音楽、詩などの複雑な芸術やヒンドウ的仏教的神秘主義を保持し育成してきた。彼らは、アバンガン *abangan* のようにジャワ神秘主義のアニミズム的要素を強調することもせず、サントリ *santri* のようにイスラム的なものを強調することもしない。彼らはヒンドウ的なものを強調する」(Geertz, C. 1960, p. 6)。引用文中、アバンガンとサントリとはプリヤイと並ぶジャワ文化の下位伝統及びそれらを保持する人々を意味する。後者の意味では、アバンガンとは農民を、サントリとは商人を指す。
- 6) Dirdjosiswojo は、崎山や Bakker の分類と異り、「老敬体 (*wredha krama*) を更に「純粹老敬体」(*wredha krama lugu*) と「中間敬体」(*kramantara*) ないし「純粹敬体」(*krama lugu*) に二分している。この説明はこれら両者を一括した「老敬体」に関するものである。  
 「年長者が(彼より)地位が高い年少者に対して用いる」型式は、最低語一類においてもみられた。両者とも充分起り得ることで矛盾はしない。ただし、最低語一類は常体が基調で、その点では年齢差を言語に直接的に反映させ、然る後に地位の高さを修飾語的に表現したとみることができるとに対して、老敬体の場合は相手の地位への配慮を優先させ(従って相手が年少者であっても敬体を用いた)、然る後に年齢差の点では自分の方が優位にあることを接辞によって付加的に示すとみることが出来る。つまり、年齢と地位のいずれを優先させるかによって導き出される二つの文の型式である。こうみると、最低語一類の存在から、Koentjaraningrat の「地位の違いへの配慮は年齢差への配慮より重要である。」(Koentjaraningrat, 1957, p. 14) という記述は疑問に思えてくる。
- 7) Bakker, Dirdjosiswojo, Koentjaraningrat は中間敬体 *kramantara* と名付けている。
- 8) Geertz は「最敬体」(*krama inggil*) の所でこう説明する。しかし、彼の言う「最敬体」は一般的な十

分類法では若敬体に入る。

- 9) 謙讓形の語を用いることから謙讓体 *krama andhap* とも言う。  
 10) 六分類の Geertz, 九分類の Koentjaraningrat や Horne については筆者のもつデータ分析には不十分なので特にとりあげなかったが若干紹介しておこう。

Geertz は、まず常体 *ngoko*, 準敬体 *madya*, 敬体 *krama* を三つの主要なレベルとし、それぞれの型式の骨格をなす「同階層語群の結合」(the linked conjugate set) を文型素 *styleme* と名付ける。この文型素とは別に高・低二種類の敬詞 *honorific* を考え(高い敬詞とは最敬形 *krama inggil* のことであり、低い敬詞とは敬形 *krama* の語である)、文型素と敬詞の結びつき方から6種類の文型ができるという。最も低いものからあげると1. 通常体 (*ngoko biasa* 又は *ngoko*), 2. 準常体 (*ngoko madya* 又は *madya*), 3. 雅常体 (*ngoko sae* 又は *ngoko alus*), 4. 準敬体 *krama madya*, 5. 通常敬体 (*krama biasa*), 6. 最敬体 (*krama inggil*) である。このうち、1, 4, 5が敬詞なしの文型で、2は低い敬詞が結びついたもので、3, 6は高い敬詞が結びついたものである (Geertz, C., 1960, pp. 248-260)。

Geertz の考え方はジャワ語の敬語を分析するにあたって非常に有用であろうと筆者は考える。しかしながら、彼の調査地(中部ジャワの東部地方)の言語(筆者の調査地であるヨクヤカルタ特別区の言語と同じであるが、敬語の複雑さにはかなりの相違があると言われている)の使用状況に影響されたと思われるが、その分類は徹底性を欠く。また、彼の持論であるジャワ文化の三つの異形にこの言語現象をやや強引に結びつけようとした感がある。

Kats を踏襲した Koentjaraningrat の分類は、1. 常体 *ngoko*, 2. 低常体 *ngoko andhap*, 3. 最低語 *basa antya*, 4. 敬体 *krama*, 5. 老敬体 *werdha krama*, 6. 中間敬体 *kramantara*, 7. 準敬語 *basa madya* (常準敬体 *madya ngoko*, 中間準敬体 *madyantara*, 敬・準敬体 *madya krama* に三分する) である (Koentjaraningrat, 1957, pp. 15-16)。

また、Horne, E. C., は1. 純粹常体 *ngoko lugu*, 2. 最低語一類 *antya basa*, 3. 最低語二類 *basa antya*, 4. 敬・準敬体 *madya-krama*, 5. 中間準敬体 *madyantara*, 6. 常・準敬体 *madya ngoko*, 7. 若敬体 *mudha krama*, 8. 中間敬体ないし通常敬体 *kramantara* ないし *krama lumrah*, 9. 老敬体 *wredha krama* である。

両者ともほぼ同じような分類であるが、両者共通して最敬体を欠いている。また、例文がないために、Koentjaraningrat については、低常体と最低語の相違、敬体(4, 5, 6)の三つの階層の間の相違及び準敬体の三つの階層の中の相違がいずれも明瞭ではないし、Horne については、敬準敬体と中間準敬体の説明がむしろ逆に思われるがこれまた例文がないので明かではない。

- 11) マルタニ村 (Pedukuhan Martani, 仮称) はヨクヤカルタ特別区スレマン県カラサン郡タマンマルタニ行政村にある。73世帯、人口343人(1978年5月現在)。村の概況に関しては、染谷, 1980 参照。  
 12) ヒンドゥー教遺跡プランバーナン寺院がある町。マルタニ村に最も近い比較的大きな町で、村人たちは農具や日用品を多くここで買う。  
 13) ジャワの現代演劇の一種。主にジャワの歴史物語から題材をとるが、現代ジャワ語による即興的な会話が入ったり、現代を風刺する道化役者が出て来たりするので村人たちには非常に人気がある。割礼式や結婚式の際に行なわれることが多い。  
 14) ジャワ語ではしばしばこのように東西南北を用いて方向を示す。この場合、南の方にある M 夫婦が経営する簡単な食料品を売る店 (*warung*) を指している。  
 15) フィリピンにある国際イネ研究所 (IRRI) が開発した水稻の品種番号。くわしくは染谷, 1980 参照。  
 16) 氷菓子の名前。小さなリヤカーに乗せて売りに来る。この場合、売り手 (mAM) は同じマルタニ村に居る。染谷, 1980 参照。  
 17) 幼稚園 (*taman kanak kanak*) に通っている娘の名前。fTW は幼稚園を学校と言っている。  
 18) mSR の娘の名前。筆者の調査が終る頃に実際結婚した。  
 19) KODIM=Romando Distrik Militer。話者の mSA は退役軍人。染谷, 1980 参照。  
 20) 最低語一類をプライイ独特の言語階層と限定する Geertz のような論者もいるが、全ての論者がそう主張しているわけではない。  
 21) 第二表で明かなように、「なじみではない農民同士」が使うと言われている敬・準敬体が E-2, E-4, F-2

- で使われ (E-2 は隣人同士, E-4, F-2 は親類関係にある者同士の会話), 中間準敬体が E-3, F-3 で用いられ (E-3 は隣人同士, F-3 は親族関係にある者同士), また, 年長者の年少者への文型と言われる老敬体が E-1, F-1, F-4 で用いられている (実際には全て年少者が年長者に向けて使われている)。
- 22) もし第三者が対者より地位が低いとか年少であれば, 第三者の行為などに最敬形を適用できない。Koentjaraningrat, 1957, p. 15.
- 23) E-2 は中間準敬体ともみなせるが, そうした場合, mSR は二つの代名詞を差別して用いているとは言い難くなる。
- 24) C-1 の *ngutus* (お命じになる, 最敬形) は命じた主体である mbah M を高めたのであって対者を高めたわけではない。注 22 で述べたことはこの場合にもあてはまる。
- 25) 呼称の機能については, 染谷, 1976 a. 1976 b. 参照。

## 参 考 文 献

- 1) Bakker, J. W. M. (1964): *The Giri-Sonto Course for Javanese*, vol. 2, Ungaran.
- 2) Dirdjosiswojo (1957): *Krama Inggil*, Jogjakarta.
- 3) Geertz, C. (1960): *The Religion of Java*, London.
- 4) Horne, E. C. (1974): *Javanese-English Dictionary*, New Haven and London.
- 5) Koentjaraningrat, R. M. (1957): *A Preliminary Description of the Javanese Kinship System*, Yale University Southeast Asia Studies Cultural Report Series.
- 6) 崎山 理 (1974): 「ジャバ語の敬語」, 林四郎・南不二男編『世界の敬語』(敬語講座・8), 東京: 明治書院。
- 7) 染谷巨道 (1976 a): 「ジャワ社会の人間関係における規定様式」, 『社会科学討究』第 61 号。509-526 頁。
- 8) 染谷巨道 (1976 b): 「ジャワにおける親族呼称の機能と構造」, 『民族学研究』41 卷 2 号。105-136 頁。
- 9) 染谷巨道 (1980): 「ジャワ農村の経済生活」, 『帯広畜産大学学術研究報告』第 II 部第 5 卷第 3 号。